

五味菜枯

指
十
八
七
六
五
四
三
二
一
妻へ

集英社

五味康祐

ハジメに小説家

一九六二年八月十日 初版
一九六二年八月二十日 再版

定價 三五〇圓

著者 五味 康祐

發行者 陶山 巖

印刷者 田中 忠

發行所 株式會社 集英社

東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三

振替 東京 一五六五三

印刷 大日本法令印刷
製本 石橋製本工場

©1962 K.GOMI

Printed in Japan

目次

指さしていふ……………五

麻衣緑衣……………五

大理石の膝……………三

麻薬3號……………九

モダン寺附近……………一〇

キルク部屋……………二八

麻薬會館……………二二

白　い　埠　頭……一六

舞　踊　會　館……一七

地下室の液體……一八

西風の見たもの……二〇

赤　　　　　瓦……二三

カ　ジ　　　前で……三一

結　　　　　び……三四

あとがき……………二四

装幀 佐野繁次郎

指

さ

し

て

い

ふ

妻へ

しのびやかにノックすれば水薬の香はみちてゐて君は語らず。

あなたの少女時代の歌で、こんなのが思ひ出される。

春日神社の社家に生立ち、かつてはその社の巫女として朱の神苑に鈴を振つてゐたといふあなたが、私たちの雑誌『新林』に参加して来て、このやうな歌を書いてゐたのは昭和二十一、二年頃であつたか。あの頃あなたは養家の姓を名乗つて青山千鶴子と云つたが、その活字の明朝體が少女たちの詠草の中にあつて、くつきりと浮んでゐたのを、今も清々しく思ひ起す。

大和路や宵宮の祭禮をバックに、古風な娘を聯想させるあなたの歌には、裏千家の師匠をしてゐた養母の死や、牡蠣船に牡蠣を剥く少女や、萬葉植物園を彷徨ふ乙女やが歌はれてゐるかと思ふと、遊園地の卓球場やレストランの白い食卓やブラットホームの直線の構圖やが歌はれてゐた。何かしら陰影の深い情感とともに、幼稚で純な紛ふ事のない一人の少女の姿が其處に在るのを、月々の詠草に私は興味深く讀んだ。

その後の同人雑誌の席上で逢つたあなたは、黒つばい

結城に朱塗の高下駄、眼鏡をかけた眸容は何となく、北歐の映畫女優を聯想させた。眼鏡を光らせたひら面で、あなたはしつとりと人の言葉を吸取るやうな仕草でうなづき、調子の高い聲音で悠つくりとものをいふ娘であつた。

養母の死のあと、尼崎で外科醫を開業してゐる兄の許にかへつたあなたは、其處が好きだと云つて靈鑑寺の周りを散策しては、時々私達の下宿を訪ねてくれた。私達『新林』の同人は、櫻井や平松や由谷やで共同自炊をして『新林編輯部』の看板を下宿の傾いた窓に打附けてゐたが、内實は放埒無頼の浪人暮しにかはりなかつた。平松はヘーゲルの辨證法を本當に理解出来る者は日本に十人とは居るまい、俺に分るわけがないと嘯き、櫻井は中原中也がひの詩を作り、私は、ヘーゲルとヘルダーリンのやうにならうと平松と話しあつて専ら涙の出るやうな美しい小説を念願してゐた。私達五人の中で、由谷だけはコッソリ歴史哲學を讀み、物言ひも萬事大人びて落着いてゐたが、あなたが編輯部へ遣つて来るのは、ひそかに由谷に好意を懷いてゐるからだらうと私は思ひ、由谷を除いた他の同人もこの觀察には同感してゐた。あな

たの義兄である奈良の前川佐美雄さんの家へも、時々、あなたは由谷となら一緒に遊びに行つたし、前川さん夫妻も慥に由谷には好意を寄せて居られたと、今でも思つてゐる。アナタノオ話ヲ今日、母ニシマシタ、密林カラ此處マデ光ガトドイテキマス。あなたのこの歌を雑誌で讀むまでは、だからあなたに對する特別の關心は持たなかつた。アナタノオ話と呼び掛ける感情が、私のした南洋の寓話につながるものと覺る迄は。

その前の年であつたか、あなたは見合の寫眞を撮つてくれと云つて奈良の北村さんの寫場を訪れた。何しろあなたの義兄の前川佐美雄は奈良の有名な歌人であり、その人の紹介とあつては北村さんも氣を張らざるを得なかつたのだらう。丹念に四五種のポーズを撮つたが、その間、寫場に思ひがけず私の姿を見出したあなたの、娘らしい羞恥を、私は由谷に見せてやりたいナと考へる程度にししか、この時はまだあなたに關心は持つてゐなかつた。撮した後で、私達は待合室の長椅子に掛けてあなたの宇治川吟行の話をきいた。夜、川を下る舟の中から岸邊の螢をみた美しさを、あなたは一時間ばかりも話して歸つていつた。時が時だけに、そんなあなたのしつとりした

話しぶりに北村さんと私は、清潔な、ほのぼのとしたものを受取つた。羞恥を變に誤魔化したり、誤魔化すために氣負つた話し振りをしたりしないあなたの態度も、サラッとしてゐて氣持がよかつた。由谷を愛しながら見合をするのかと、如何にも今どきの青年らしい意地惡な追求をする興味からは、人間的に、私は遠い氣性の男だつたし、さういふ追求にひそむ無責任な好奇心を寧ろ拒否すべきだと思つてゐたから、あなたの見合に關して由谷の方の氣持を忖度する事もなかつた。それつきり、見合の寫眞が實際には役立たなかつたと知らされても、私は實は寫眞の事など忘れてゐた。

その翌年、あれは私が東京の龜井勝一郎氏の紹介で三鷹に下宿する前——昭和二十二年六月三日だつたか、あなたから突然の速達を受取つて、京都驛へ迎へに行つたが、あなたの手紙は『檢閱濟』で私の手許に届くのが遅れたために、行違ひになつて、あなたは獨り下宿を訪ねて來た。それと知らず私は河原町の女性の入りさうな商店を、一軒々々、のきなみにあなたの姿を探して廻つた。私達五人の中から特に私を名差した手紙が來たのは意外だつたし、何か、私にだけ話し度い事のありさうな文面

に、私は由谷との「提灯持ち」を頼まれるのかと思つたり、或ひはもつと高まつた浪漫の日が二人の間に開花するのではないかと、文學青年らしく想像して、非常な緊張の中にあなたを探した。あなたが下宿へ來てゐると電話で知つた時、だから肩すかしを喰つた失意と落膽が私を襲つたのは否定出来ない。受話器を截つた時から私は冷えきつた自分を寧ろ持餘した。

あなたは何でもなく京都へ出掛けて來たやうに、悠つくりとバスを降りた。停車場の前で待つてゐた私を、そしてキョロキョロと探した。あなたが近眼なのを、私はこの時ほど微笑ましく思つた事はそれ迄にない。冷靜を持餘してゐた私の不機嫌はこの時をさまつた。私は多少の金錢を用意してゐたので、あなたを高臺寺下の「一休庵」へ誘つた。

五味さんが東京へいらつしやるなら……あなたは何をプレゼントにのぞむかと尋ねた。私は萬年筆がほしいと言つた。それから、前川さんの家であなたは龜井さんにはお目にかかつた事がある、と話したり、三鷹の下宿先の模様をきいたり、同人雜誌に載せた私の小説への感想を語つたりした。時々白いハンカチで口もとの食べたあ

とを拭ふそんなあなたを瞞めて、私は自分の家の資産相續をめぐる醜いさかひや、雜誌の難行ふりを幾分諂諂の口調で打明けた。その名を云へばあなたも知つてゐる私の家の經營する映畫館の不振は、そのまま「新林」の發行に影響してゐたのは事實だが、あなたの關心には、どこか雜誌のことだけでないプライベートな私の問題への氣持の動きが感じられたので、眞顔に私になると、東京へお行きになつたら淋しい、とあなたはポツンと言つて項垂れた。

あなたの僕への話といふのは、その事です、と私は尋ねた。あなたはこの日は銘仙の着物に、下駄だけ桎の通つた洒落れたのを穿いてゐた。さういふ趣味は私の氣にいつた。「一休庵」で出される普茶料理のあれこれに就いてあなたの洩らす味覺にも私と共通のものがあつた。私達は一席の食事を偕にしてゐるだけで、或る安らかな落着いた氣持に誘はれるのを感じた。私はあなたに對して、好意を持つてゐたと、だから打明けるのが、あの場合の青年として最も普通な態度だつたと、今でも思つてゐる。私は貴女への好意をことばにした。うれしいわ……あなたは眼で靜かにわらつて、本當にうれしいわ、と繰

返した。私達は間もなく「一休庵」を出た。

あの時雨が降らなかつたらそれでも私はあなたの肩へ手をまはしたりはしなかつたらうと思ふ。私達一族はここごとく戦災にあつて焼出された身だつたので、復員後の自炊生活をしてゐても私には満足な衣服がなかつた。

併しこの日は取つておきの、祖父の遺品分けに貰つた鹽澤御召を着て、つづれの袴を私は穿いてゐた。御召は雨に濡れると見る見る縮んでしまふ。あなたの蝙蝠傘は大へん小さかつた。私は入れて貰ふならあなたに身を寄せねばならぬ状態におかれてゐた。あなたは傘をひろげて差しかけてくれたが、私は思ひきつて、御召が縮むのを口實にあなたの肩を抱いた。「一休庵」から河原町四條までさうして歩いた。あなたは身を固くしたままで一町ほどもついて來たらうか。あの時私は二十七歳で、あなたは二十四になつてゐた。あなたの體內にはもう「女」が成熟してゐたし、さういふ女性の成熟は偽りなく私の掌のうちに傳はつた。私は、龜井さんが家出した奥さんとの新生活を持つたのも二十七歳の時だつたと昂奮して喋つた。さういふ言葉の一つ一つは、その儘、私とあなたの結婚生活への暗示的意志とあなたが受取つたのを後

になつて私は知つたが、あの時はただ異性を抱いての澎湃とした感動が私にさういふ饒舌を強ひたので、けつして、あなたとの結婚生活を直接考へたからではなかつた。實をいふと、それ處か、あの時の私には思つてゐる人があつた。その人に私は遂に拒まれつづけた。それでもそれは愛情を拒否されたので、友人としてなら何時でも會ふ事の出来る女性だつたから、私はあなたを抱いて、本當はこれが彼女ならとひそかに考へたのだ。あなたの所爲ではない。誰であつても、その人以外の女性を抱けば私は同様のねがひをいだいたらう。それに「一休庵」であなたの感想を述べてくれた小説にも、私はその人の事をかなり忠實に書いてあつた。だからあなたに彼女の事をかくしてゐるわけではない、といふ辯解が私の側では成立つた。あなたが身を固くしなければならぬことへの責任めいたものを私はそれで紛らし、「かく誘ふもの何であらうとも、私たちの内の、誘はるる清らかさは私は信する」と、好きな詩の一節を私はくちずさんだ。すると突然、「伊東靜雄のその詩は私も大好きです。」とあなたはびつくりするやうな高い聲を出して言つた。あなたの身を固くしてゐたものはそれで崩れた。

太陽は美しく輝き

あるひは 太陽の美しく輝くことを希ひ

手をかたくくみあはせ

しづかに私たちは歩いて行つた

かく誘ふものの何であらうとも

私たちの内の

誘はるる清らかさを私は信ずる

.....

私達は小聲に口ずさみ乍ら歩いた。

東京で住むやうになつてからの私は、しばらくは連日のやうに龜井さんを訪問して、書齋に入りびたつた。一無名の文學青年が、名の高い文學者に目をかけられ、自由とその書齋を訪問する事が出来、作家の誰彼に時に紹介されて話の出来ることがどんなに幸福かは、文學青年なら分るだらう。櫻井や平松とは幾らかそれに籠められた感情の質の違ふあなたの《新林》の近況を報らせてくれる便りへの返事に、私は昨日小説家の誰と逢ひ、今日誰と話したなどと刻明に報告した。時に誇張を伴つたさういふ手紙が、少しづつ私自身を偉くしてくれるやうな

錯覺に酔つてゐたから、そんな手紙の末尾で、あなたへの愛情を一二行うたつてゐたのも今から思へば錯覺に秘められた副作用だつたらう。それと知らぬあなたの手紙には、次第に感情がこめられ、私の錯覺を偲に錯覺する幸福感が文意の多くを占めるやうになつた。いいお仕事をして下さることを祈ります、とあなたは書き、わたくしはもともと才能のない女でございますけれど、あなたはきつと、素晴らしいお仕事をなさると信じてをります、龜井さんの前川へのお手紙にも五味は大物になるかも知れぬと書いてございました、ガンバッて下さい。などと書き送つて來た。そんなあなたの手紙に、もう許婚でもあるかのやうな私にかけられた期待や夢の重大さを推察するほど、私は用心深くなかつた。昨日は徹夜で二十五枚も書きましたと私は走り書きを送り、誰かチョコレートを恵んでくれぬものか天よ、腹が減つたと歌でもうたふやうに書いた。私は甘えてゐた。するとかならず、あなたからは爲替が届いた。

その頃私の書き綴つた小説は、全て、私の愛をゆるさなかつた京都の人への、どう仕様もない戀情に根差したもののばかりだと言つていい。私は『日本浪漫派』に文藝

の上の發想以上に、文學者の自戒を學びとつた。清らかなもの、善美なもの、東洋民族への愛を、どれほど強くうたひ上げてゐても歌ひすぎる事はない、とその頃私は考へてゐた。當時世間に發表される作品の殆んどは、戦時中のアリバイを言ひ、軍閥に躍らされたとか叫び、一方では殊更に露はな性描寫が「自由」の名で瀾漫してゐた。若者らしく私はそれに怒りを持つた。如何に躍らされたにしても、銃を把つた其の事の責任は私達自らのものとして残る、と私は考へたのだ。生涯での最も貴重な時期——勉學の時代に出陣を強制された我々のどう仕様もない知識低下に對する絶望を私は思ひ、絶望のもつてゆき場のない煩悶や、現實の生き難さを一人の女性への誠實な愛によつて支へてゆく——さういふ青年の文藝を僕は持たねばならぬと考へた。私が京都の人を忘れきれないのは飽迄私的な理由でだが、さういふ心情を文學的に綴らせたのはこの「ねばならぬ」だつた、と思ふ。私はその人と遂に指一つ觸れたことはなかつたから、その人を描く上で、作品を面白くするために作家的に虚構する愛の場面は、全て、堪へ難く不潔なものに自分では考へられた。不潔感に執する限り、作品はだから面白いも

のなるわけはなかつた。私はそんな小説を龜井さんの所へ持つて行つた。うまくゆけば『文學界』に載せて貰へるかも知れませんが、とあなたへは書き、一週間して行つても、まだ讀まれてゐない。三週間目に困惑の表情を龜井さんの顔に見て、私は後悔のホゾを噛み、大變冷淡な慰めやうをする龜井夫人を、つまらぬ人だとにくんだ。三四度、そんな事があつた。或る日のあなたの手紙で、前川さんの短歌雜誌「オレンヂ」が私の寄稿を待つてゐると聞かされ、ついで前川さんからも慇懃の手紙を受取つたので、一晚の徹夜で私は前川さんの歌集の批評を書いた。その發表誌は龜井さんの手許にも送られてゐたが、意外に龜井さんは褒めて下さつた。さうしてその時はじめて私とあなたとの間柄を問はれた。あの雨の夜の一件をのぞいてありの儘を私は話した。併し雨の夜の事を除けば私達の間に何も特殊な關係が生じてゐるわけではない。「ただそれだけの事なの？」と夫人にあらたまつた訊き方をされ、私の方で驚いた。好きか嫌ひかを訊かれ、好意は持つてゐると返事した。

ハッキリしないかういふ私の態度を、龜井家を出て一人になつてから私は恥ぢてゐる。私は前川さんを日本浪

曼派の精神につながる人として尊敬してゐたし、あなたが前川さんの義妹であり、そのあなたと結婚する事になれば、さういふ人の私は間接の義弟となり、私の立場は浪漫派の作家の人々に一つの存在となるだらうといふ、愛情とは關りない處で或る満足を私は感じる事があつた。辯解の餘地もなく私はあなたよりは文學を愛した。文學と女性が愛の方向で齊^{ひとしな}な形をとるのは京都の人の場合にその頃限られてゐた。もしあなたと結婚するならば尊敬する文人の義弟になれる、といふ満足感がどれ程あなたへの其後の私の關心の中で大きな部分を占めてゐたか知れない。あなたのために、これは不幸だつたと私は思はないが、前川さんのためには大變お氣の毒なことだつたと思つてゐる。

『オレンヂ』に批評めいた文章を發表した頃から私の生活はくるしくなつた。大阪の祖母からの送金は途絶えがちになり、私はどんな事をしてでも下宿費をとどこほらせではならなかつた。龜井さんの紹介で入つた下宿は、曾て龜井さんに師事した人の未亡人の家であつた。五歳の男の兒と、當歳の乳呑兒をかかへた未亡人の生活は彼女

の實兄の勤めの收入と、私の下宿費でまかなはれてゐた。食糧事情のまだ窮迫してゐた當時、私の下宿費が支拂はれなければその日から子供達の餓ゑが迫る状態に一家はおかれてゐた。それで最初の頃は潤澤な手許のままに十二分の下宿費を私は拂つた。未亡人の亡くなつた主人といふのは却々の藏書家だつたので、少しづつ彼女は本を賣つて生活を補つてゐた。作家志望の男がどんなに本に愛着するかは察して貰へやう。私は、同じ賣られるなら、私の方で買取る事を申し出、互ひの遠慮がちな交渉の遣り取りのうちに、少しづつそれらは私のものとなつた。と云つて實は、もともとそれらは私の借りた部屋に置かれてゐたから、私は下宿費とは別に生活の援助も未亡人に與へてゐるやうに表面では見えたのだ。彼女は道を歩いてゐて人を振返らせるほど美しい人であつた。まだ三十を過ぎたばかりで、次第に彼女は自分の主人との戀愛の長い履歴を、ぼつりぼつり打明けてくれるやうになつた。アルバムの寫眞も見せて貰つた。彼女の主人といふ人は、シナリオ・ライター猪俣勝人氏の弟さんで、當時から私もその脚本家の名は知つてゐたし、脚本家の結婚の媒妁人が佐藤春夫先生だと聞いた時には、いろいろ

るな意味で一そう未亡人の戀愛を讚美するやうになつた。現實の生活では、いよいよ生計の上に俠氣めいて責任を覺えるやうになつた。と云つて送金の用途の次第に心細い状態では、私は何とか内職をする必要があつた。

龜井さんから幹旋された内職の口は、倉田百三選集の編纂を手傳ふことだつた。龜井さんが選集の編纂人として出版社から得られる報酬をこちらに廻して貰つた。おかげで、私は収入を與へられて百三の全著作に目をとほす機會をえた。本を読む爲には本を買はねばならぬと思ひ込んでゐた青年が、報酬を受けて讀書の出来る事に大へんトクをしてゐる感じを持つたのは、やむを得ないだらう。東京に出た當時のあの幸福感が私の日々に満ちはじめ、少時途絶えてゐたあなたとの文通が又はじまつた。

今思ふと、私は何か自分が恵まれ、祝福され、幸福であると感じる時にかぎつてあなたに手紙を書いてゐる。自分の得意な状態をあなたに知つて貰ひたいと欲してゐる。大へん若やいだ、稚拙なさういふ働らきかけがあなたへの私の關係を其の後も終始つらぬいて來たと思ふ。

さて私はそんな手紙に次第に大膽な言葉を使ふやうになつた。あまり大膽だとあなたはしばらく返事をくれな

かつた。こちらの大膽さは所詮氣分に作用されてゐるものだから、時として投げかけた言葉を自分で忘れてしまふ。あなたはそれに悠つくり時間をかけ、一生懸命考へて、遂にこちらを吃驚させるほど大膽な返事を用意してしまふのだ。そのいい例が、はじめて東京に私を訪ねて來た時だつたらう。

あなたは一たん新潟の女友達をたづね、此處まで來たのだから東京へ寄つて歸らうかと思ひます、ハガキでそんな辯解を用意してからでなければ出て來なかつたが、私にとつては、突然のあなたの上京である事にかはりになかつた。朝六時上野へ着くといふ速達を前の晩に受取つて、慌てて私は未亡人に手傳つてもらつて部屋を掃除し、あなたが來ることを龜井さんに報告しておいて、翌朝、出迎へに行つた。當時の汽車の旅はまだ窓から乗つたり降りたりしなければならぬ時だつた。そんな旅行にあなたが女の身で單身新潟から廻つて來るのが、どういふ事を意味してゐるかを私は迎へに出向く電車の中で考へつづけた。私には、東京での生活の間、女性の友達はひとりもなかつた。私は二十八歳になつてをり、あなたの肩に感じたあの成熟の彈力が私の掌の内に甦るのをど

う仕様もなかつた。あなたは泊つてゆくだらう、それなら、一先づ私は部屋の外の廊下で寝やう、あなたが若しそれを苦しく思ふなら、私達の間に新しい一夜が明けるかも知れぬ……さう考へて、何事もあなたの出方にまかせるつもりで、私は上野驛の混雑の中でああなたの降り立つ姿を待った。

リュックを背負つた頑丈な青年達の背後から、あなたは俯向きがちに、ひっそりした感じであらはれた。當然人波に私の姿を探し乍ら来るものと思つてゐたのに、俯向いてゐるそんなあなたの姿を見て、『出迎への微笑』を泛べてゐた私の頬が強張るのが自分でも分つた。私は歩み寄つて行くのをやめた。あなたの方から、黒い鞆を手し、ゆつくりと近づいて來た。私達は何でもないやうな出會ひの會釋を交しあつた。私はあなたの鞆を受取つた。

上野から三鷹までの電車の中で、あなたは殆んど物言はなかつた。疲れたでせう、と二三私の方から話しかけても至極頼りない返事をした。私は簡単に自分の下宿してゐる部屋がどんな様子かを、豫備知識を與へるつもりで話したあとは、黙つて肩を並べて吊革を握つてゐた。

すると、出来れば今夜のうちに大阪へ歸らうと思ひますと突然あなたは言つたのだ。

正直に云ふが、あなたの言葉をきいて私は失望した。自分の心に染まぬ事を云はれると、つまらぬ奴だと思ふ癖が私にはある。私はあの時あなたを要求するつもりはなかつたし、あなたがのぞむなら、よろこんで廊下で眠るつもりでゐた。そんな私である事を察しないあなたなら、つまらぬ、と私は思つたのだ。上野驛からあなたの俯向いてゐた意味が分つた事も一そう私を味氣なくさせた。——結局、あなたはこの日私の部屋へ泊つたが、私は廊下で眠らず、未亡人に頼んで一室を明けてもらひ、徹夜で原稿を書いた。さらさら本の走る音をあなたは寢床の中でいつまでも聞いてゐたといふ。あの時私は例によつて京都の人との思ひ出を書いてゐたのだ——。

あなたからの激しい愛の手紙が送られて來るやうになつたのは、大阪へ歸つてからだつたやうに思ふ。私は、殆んど返事を出さなかつた。併し龜井夫妻へは、よくあなたから手紙の來ることは何かの話の中に挟んでおいた。龜井夫妻と云へば、あの徹夜した翌日、私は行きたくないといふあなたを誘つて龜井家を訪問した。あなたと夫